

## 現在における幼児の育ちの傾向（8） － 発達プロセスの個人差の検討－

### A Study on Developmental Changes of the Contemporary Preschoolers: Individual Difference in Developmental Processes of Results of Teachers' Longitudinally Evaluation

長田 瑞恵<sup>1)</sup>

Mizue NAGATA

関口はつ江<sup>2)</sup>

Hatsue SEKIGUCHI

野口 隆子<sup>1)</sup>

Takako NOGUUCHI

#### 要 旨

本研究では、子ども一人一人を縦断的につないだ時系列の変化パターンそのものをクラスタ分析にかけるという方法を用いて、発達パターンの個人差を検討した。具体的には3年度4時点に亘る発達評価の個人差に焦点を当て、4時点でどのように達成率が変化したのかによって、時間的経過に伴う発達の推移のタイプを分類することを試みた。その結果、子ども達は3つのタイプに分類された。タイプⅠは各時期を通して一貫して集団内の上位で推移した子ども達であったが、その一部は調査3時点目で達成率が伸びない時期を経験していた。タイプⅡは各時期を通して一貫して集団内の中位から中上位に推移した子ども達であった。タイプⅢは各時期を通して一貫して集団内の中下位から下位に推移した子ども達であった。以上の結果は、年齢相応の発達とは何か、その子どもにそのときに必要な援助とは何かを考える必要性を改めて問題提起するものであると考える。

#### Abstract

In this study, we performed cluster analysis on longitudinal time series variation patterns of individual children in order to examine individual differences in development patterns. More specifically, we attempted to classify types of developmental transitions over a course

<sup>1)</sup>十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科

Department of Early Childhood Care and Education, Faculty of Human Life, Jumonji University

<sup>2)</sup>東京福祉大学

Tokyo University and Graduate School of Social Welfare

キーワード：幼稚園児 発達評価 個人差 クラスタ分析 縦断的検討

of time by focusing on individual differences in developmental assessments over 4 points in time during a 3 year period and looking at how achievement rates changed over those 4 points. Children were classified as one of 3 types based on the results. Type I children consistently ranked at the top of the group throughout their transitions over the 4 points of time, although some subjects experienced slow growth in achievement rate during point 3 of the investigation. Type II children consistently ranked in the middle or middle to top of the group throughout their transitions over the 4 points in time. Type III children consistently ranked in the middle to bottom or bottom of the group throughout their transitions over the 4 points in time. These results once again raise questions about the necessity of considering what age-consistent development means, and what kinds of support are needed for each child at certain points of time.

## はじめに

現代における幼児期の発達の実態はどのようなものなのであろうか。現代の幼児の発達の実態を明らかにすることは重要である。なぜなら、近年、幼児の生活環境の変化による発達の問題が指摘されているからである (e.g., 仙田, 2005)。

いくつかの先行研究から、子どもの発達の実態に変化が生じていることが報告されている (e.g., 秋山, 2004; 郷間, 2003, 2006; 関口, 2003)。これらの研究は異なる発達検査、発達評価を用いているにもかかわらず、過去と比較した場合の現在の幼児期の発達の遅れを指摘していることは、この時期の発達の変化が顕著な現象として生じていることを示していると言えよう。その一方で、幼児期の発達の遅れだけでなく、発達の回復を示す研究もある。関口 (2003) では、3歳児で見られた発達の遅れが5歳児においてはかなり回復しており、幼稚園教育の影響力が大きいことが示唆された。

以上のような幼児期の発達の変化を示した先行研究の結果をふまえ、筆者らは現在の幼児の発達状態をさらに詳しく把握するために、継続して検討を行ってきた。関口・長田・野口 (2005) では、各幼稚園における一人一人の幼児の育ちの過程をよりの確に捉えるために、評価項目を修正して発達評価項目を現在の幼稚園教育要領のねらいに即する内容を含む6分野にして検討を行った。さらに、長田・野口・関口 (2006) では、同一調査対象者に対して同一年度内に発達評価調査を2度実施した。その結果、第1回よりも第2回の方が達成率は高く、この傾向は特に年少児と第1回の達成率が低い子どもに顕著であることを示した。

関口ら (2005) と長田ら (2006) の研究は、横断的検討もしくは、同一年度内という比較的短期間における縦断的検討であり、より長期的な視点からは、一人の子どもの連続的な発達過程や発達の速度というような縦断的実態は十分には検討されてこなかった。そこで長田・関口・野口 (2007) では、幼稚園児を対象に二年度に亘って発達評価調査を2度実施し、現在の幼児の発達の縦断的变化を検討した。その結果、3歳児クラス終盤から4歳児クラス終盤にかけての1年間よりも、4歳児クラス終盤から5歳児クラス終盤にかけての1年間の方が、達成率の伸びが大きかったことが示された。さらに、長田・関口・野口 (2008) では、3歳から5歳までの幼児期の3年間に亘る期間における発達を検討した。その結果、当初、達成率の低かった

下位群では、6領域すべてにおいてその後3年間に亘って直線的に達成率が伸びていた。その一方で、当初達成率が中程度だった中位群では、知的領域と運動的領域においては3年間に亘って直線的に達成率が伸びていたが、それ以外の領域では3歳児クラス終盤と4歳児クラス終盤との間では達成率が伸びず、5歳児クラス終盤になって達成率が伸びていた。さらに、当初達成率が高かった上位群では、3歳児クラス終盤と4歳児クラス終盤との間では達成率が伸びない、もしくは低下してしまい、5歳児クラス終盤になって達成率が伸びていた。

集団全体の平均を検討した以上の横断的研究と縦断的研究から、現在の幼児の発達の実態がかなり明らかとなってきた。それでは、幼児期の発達には、子どもたちの間にどのような個人差が存在するのであろうか。長田・関口・野口（2009）では、幼児期の発達の実態をより詳しくとらえるために幼稚園入園から卒園までの3年度4時点に亘り、発達評価結果の特徴によって示される発達パターンに焦点を当てた分析を行った。調査4時点の各時点において、6領域の達成率の高さやバランスによって発達のパターンを分類した。その結果、まず、3歳1学期には全体的に達成率が低いところに8つのクラスタが抽出され、3歳3学期には一端クラスタ数が減るもののクラスタ間にばらつきが見られた。そして、4歳3学期にはクラスタ数が増え、個人差が大きくなった後、最終的には5歳3学期に、再度クラスタ数が減り、達成率が高い位置に収束していった。

しかし、長田ら（2009）の結果からは、子ども一人一人の発達の様相までは明らかとならない。そこで、長田・関口・野口（2010）では、さらに発達パターンの違いに焦点を当て、子ども一人一人が3年の間にどのような発達の变化を示すのかを検討した。具体的には、幼稚園入園から卒園までの三年度4時点に亘り、発達評価の個人差に焦点を当てて検討した。調査の各時点における6領域の達成率の高さやバランスによって発達のパターンを分類したクラスタ分析の結果に基づき、各時点において対象児がどのクラスタに属するかを分類したのちに、その分類を子ども一人一人について時系列につなぐことによって、3年間にどのような発達パターンの変遷を示すかを検討した。言い換えれば、調査の各時点におけるクラスタ分析の結果に基づき、各時点でどのクラスタに属したかを時系列につなげ、クラスタ遷移を分類したのである。そして、発達のプロセスには多くの子どもが辿るような「典型的なパターン」が存在すると言えるのか否かを探索的に検討した結果、全体としては、調査各時点間でのクラスタの遷移の仕方は非常に多様であることが示された。その一方で、第1回調査における集団内の相対的な相対的位置は、その後も一貫して続く傾向があることが伺われた。したがって、幼児期の発達のプロセスは、当初どの程度の達成率にあったかという初期状態の影響を受けつつも、そのみに規定されるわけではないと言えよう。

そこで、長田他（2010）では、発達パターンの検討方法として、各時点を横断的にクラスタ分析した結果を時系列につなぎ合わせて分類するというやり方を用いた（図1）。この方法によれば、6つの発達領域のバランスを要因に加えて分析が可能であった。すなわち、各時点での領域別の発達程度の違いを類型化する観点から、子どもの個人差を検討する手法であった。

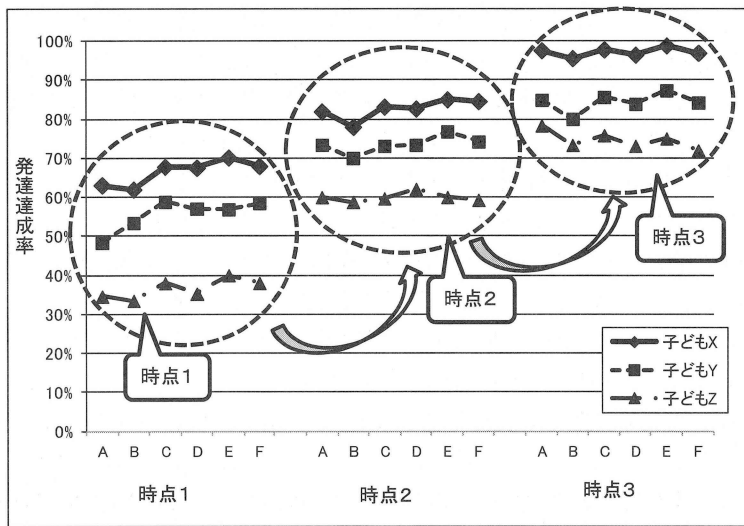


図1 発達の個人差の2つの分析方法のモデル図 (長田他, 2010)

一方、発達パターンの個人差を検討する方法としては、子ども一人一人を縦断的につないだ時系列の変化パターンそのものをクラスタ分析にかけるという方法も可能であろう (図2)。この方法を用いると、6つの発達領域に分けてその発達のバランスから子どもを断片的に検討するのではなく、各時点における子どもの全体的な発達の程度を時系列的な変化として捉えた上で分析することが可能である。そこで、本論文では、4時点でのどのように総合的な達成率が変化したのかによって、3年度4時点に亘る発達評価の個人差に焦点を当て、時間的経過に伴う発達の推移のタイプを分類することを試みる。

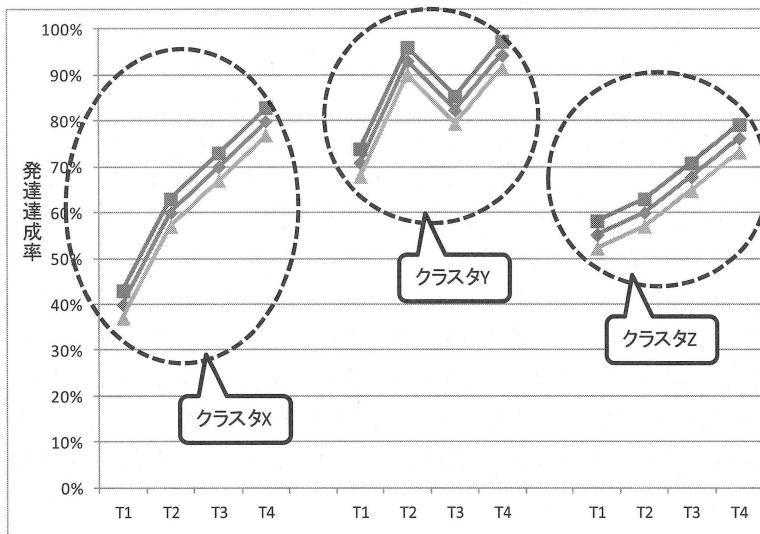


図2 発達の個人差の2つの分析方法のモデル図 (本研究で用いる方法)



## 研究方法

**調査方法** 調査項目は関口らの研究（e.g. 長田ら，2006；関口ら，2005）において使用した項目計128項目（知的領域25項目，運動的領域20項目，情緒的領域25項目，社会的領域25項目，生活習慣17項目，遊び16項目。資料参照）であった。マークシートを用い，担任保育者にそれぞれの項目について「出来る・よくする」から「できない・しない」の5段階尺度で記入するよう依頼した。

**調査対象** 関東，東北，北海道の8つの私立幼稚園に通う園児170名であった。

**調査時期** 第1回2004年6月（3歳児クラス1学期），第2回2005年3月（3歳児クラス3学期），第3回2006年3月（4歳児クラス3学期），第4回2007年3月（5歳児クラス3学期）の4回実施した。

## 結果と考察

170名について，各時点ごとに6領域合計の達成率（評定値合計／（5×128））を算出し，それをZ得点に標準化したものを従属変数としたWard法による階層クラスタ分析を行った。その結果，9つのクラスタが抽出された。さらに9つのクラスタは3つの上位クラスタに分類できたので，便宜的にそれぞれを合計達成率が相対的に高い方から，クラスタⅠ，クラスタⅡ，クラスタⅢと呼ぶ。

図3～5は各クラスタに分類された子どもの合計達成率を上位クラスタごとに表したものである。

タイプⅠは各時期を通して一貫して集団内の上位で推移した子ども達である（図3）。これらの子ども達の多くは，調査期間を通して一貫して集団内で相対的には上位に位置するものの，中には，調査3時点目で達成率が伸びない時期を経験している子ども達がいることが示された。このような伸び悩みもしくは停滞は3歳児当初に合計達成率が高かった子どもにのみ特徴的に見られる現象であった。この結果は，年齢相応の発達とは何か，その子どもにそのときに必要な援助とは何かを考える必要性を改めて訴えかける結果であると考えられる。3歳児当初に発達が進んでいる子どもの中には調査3時点目で達成率が伸び悩む子どもがいるという結果は，場合によっては，幼児期初期に全体的な発達が進んでいるということが，その後の直線的な発達を保証するということではないと言えよう。まず，調査3時点目で達成率が伸び悩む子どもと，直線的に達成率が伸び続ける子どもの違いについて，その原因について子ども自身の要因，環境の要因など多方面からの検討が必要である。そして，3歳児当初に全体的な発達が進んでいるという状態が，その子ども本来の自然な発達の姿であるのか，何らかの要因に対して過剰に適応しようとした結果なのかなど，調査対象園の保育方法や家庭での状況などの様々な要因も考慮した上で精査が必要である。その上で，過剰適応の結果であると考えられる場合には，子ども自身が自然な姿で過ごせるような配慮を伴った保育環境が必要であろう。

また，そもそも，調査3時点目すなわち4歳後半から5歳前半の時期に発達が伸び悩むという子どもたちの存在そのものが，人間の発達の道筋の多様性を示していると考えられる。一般的には「発達」とは右肩上がりの直線的なイメージ，もしくは右肩上がりの段階状のイメージとし

て捉えられていることが多いように思われる。しかし、近年の発達研究から、認知をはじめ、運動、社会性など、さまざまな領域において、一旦出来るようになったように思われた能力が、一時的に能力を発揮できないような状態に陥った後、形を変えてさらなる発達へとつながる現象の存在が明らかにされつつある。いわゆる発達のU字（もしくはJ字）曲線である。そのような観点から見た場合には、今回の調査対象児で伸び悩みを示した子どもはU字曲線型の発達を示していた可能性が考えられる一方で、今回の4時点の調査の期間中には伸び悩みを示さなかった子どもでも、更に継続して調査を続けた場合にはU字曲線型の発達を示す時期があるかもしれない。

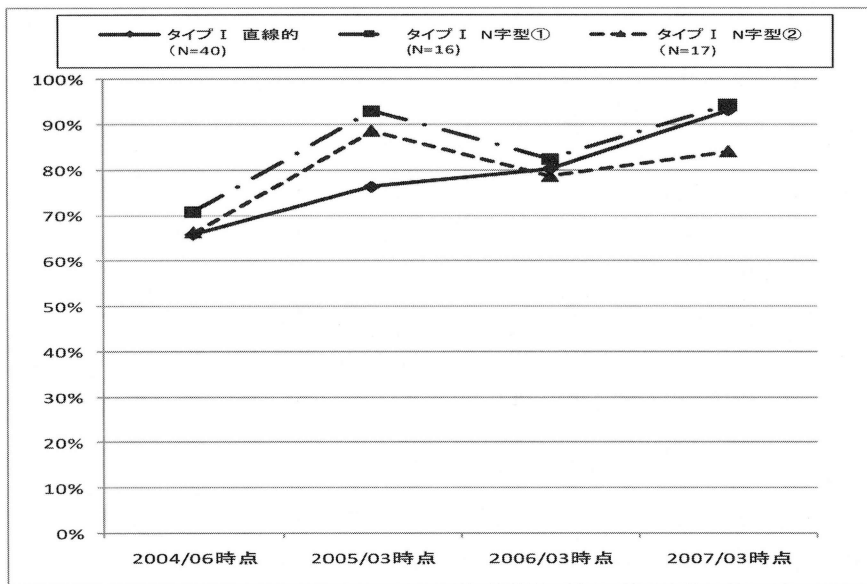


図3 タイプ I

タイプⅡは各時期を通して一貫して集団内の中位から中上位に推移した子ども達である。これらの子ども達の多くは、調査期間を通して一貫して集団内で相対的には中間的位置を占めているものの、一部は非常に順調な達成率の伸びを示し、最終的には集団内で最も達成率の高い子どもたちとなっていた点も興味深い。

タイプⅢは各時期を通して一貫して集団内の中下位から下位に推移した。これらの子ども達の多くは、調査期間を通して一貫して集団内で相対的には低い位置を占めているものの、最終的には5歳児クラス3学期の時点で達成率の平均がほぼ80%に達していた。この結果から、3歳児時点で発達がゆっくりであった子どもであっても、幼稚園教育が一定の成果を上げていたことが推察されよう。

タイプⅠからタイプⅢまでの縦断的な発達の様相を明らかにした本研究の結果からは、どのタイプの子どもたちについても、年齢相応の発達とは何か、真に子どもの育ちを過不足なく適切に援助するとはどういう事なのかを改めて考えさせられる結果であると言える。

それでは、個別の子どもに必要な援助とは具体的にはどのようなものが考えられるのだろうか

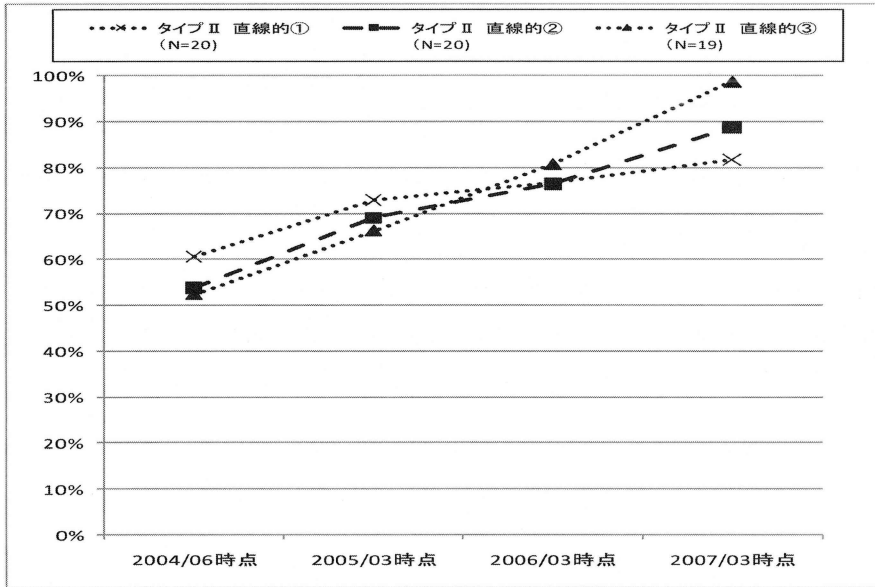


図4 タイプII

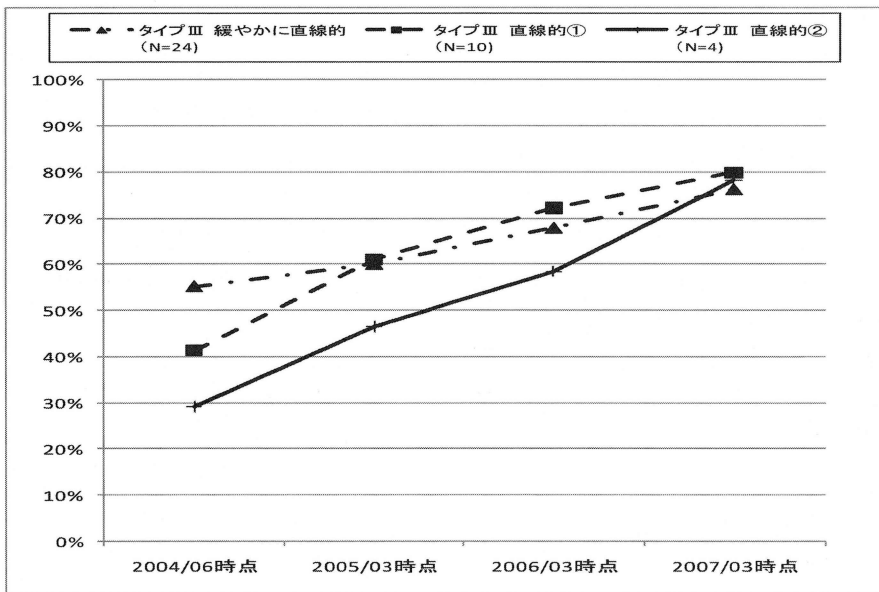


図5 タイプIII

か。この問いに対する答えは非常に難しく、また、ただ一つの正答があるようなものでもない  
と考える。しかし、この問題を考える糸口として、柏木(2008)の主張が有用である。柏木(2008)  
は子どもは「能動的な学習者」であると述べている。子どもは、自ら学び、自ら育つ力をもつ  
だけでなく、その力を発揮できることで満足と自己有能感をもち、さらに新しい活動へとつな  
がっていくと述べている。反対に周囲が子どもが熱中している状態を認めず、せっかちに大人  
が予定したことをやらせようとするものの弊害を指摘している。さらに、子どもの気質を見極  
め、子どもに応答的な態度で接することの重要性を強調している。

この柏木(2008)の主張に基づけば、子どもに必要な援助とは、個々の子どもの個性を理解  
した上で、子どもの自発的な活動を尊重しつつ、応答的に対応していくことではないだろうか。  
このような姿勢が、具体的に幼稚園や保育所の活動の中でどういう形として展開されていくか  
は、個別のケースによって異なるだろう。しかし具体的な活動がどのようなものであったとし  
ても、保育者が子ども理解に基づいて、子どもが安心して自分のやりたいことに没頭できる環  
境を保証され、そして子どもが自己有能感をもてるような応答的な関わりを行うということが  
非常に重要なことであると考えられる。

本研究のそれぞれのタイプに分類された子どもたちの保育環境や人との関わりがどのような  
ものであったかは、本研究のデータからだけでは明らかにはできない。しかし、タイプⅡのな  
かで3年間で非常に順調な伸びを示した子どもや、タイプⅢで当初ゆっくりな発達であった子  
どもたちの多くが卒園時にはほぼ平均的な発達水準にまで到達していたことを考えると、本研  
究で対象とした子どもたちの多くは、先ほど述べたような人的・物理的環境がある程度保証さ  
れていたものと推察される。

## 今後の課題

発達の様相について、量的な検討だけでなく質的な検討を合わせて行う必要がある。具体的  
には、観察を通じた行動の質的な側面の記述と発達評価結果との関連性を検討していく必要が  
あろう。質問紙評価では捉えきれないような内面的な発達について、明らかにしていく必要が  
ある。

さらに、保育の実践のしかたとの関連やよりきめ細かい個人差について検討する必要がある  
う。さらに幼稚園卒園後の小学校への適応をより長期的に縦断的に検討する必要があると考  
える。

また本データに基づいた一連の分析・結果の再現性を確認するために、他のコーホートでも  
同様の調査を行い、比較検討を行っていくことも重要であると考えられる。

## 文 献

- 秋山千枝子(2004)「津守稲毛式による現代っ子の発達の特徴」 *小児保健学会講演集*, 202-205.  
郷間英世(2003)「現代の子ども発達の発達の特徴についての研究 - 1983年および2001年のK式発達検査の  
標準化データによる研究Ⅰ.」 *子ども学(甲南女子大学国際子ども学研究所)*, 5, 11-22.  
郷間英世(2006)「現代の子ども発達の発達の特徴とその加齢に伴う変化 - 1983年および2001年のK式発達  
検査の標準化データによる研究Ⅱ.」 *小児保健研究*, 62(2), 282-292.

- 柏木恵子（2008）「子どもが育つ条件－家族心理学から考える」 岩波書店：東京.
- 長田瑞恵・野口隆子・関口はつ江（2006）「現在における幼児の育ちの傾向（2）－保育者による発達評価の縦断的調査結果－」 十文字学園女子大学人間生活学部紀要, 4, 55-67.
- 長田瑞恵・野口隆子・関口はつ江（2007）「現在における幼児の育ちの傾向（3）－保育者による発達評価の複数年度に亘る縦断的検討－」 十文字学園女子大学人間生活学部紀要, 5, 13-24.
- 長田瑞恵・関口はつ江・野口隆子（2008）「現在における幼児の育ちの傾向（4）－保育者による発達評価の3年度に亘る縦断的検討－」 十文字学園女子大学人間生活学部紀要, 6, 1-12.
- 長田瑞恵・関口はつ江・野口隆子（2009）「現在における幼児の育ちの傾向（6）－発達評価における発達タイプ差の3年度に亘る縦断的検討」 十文字学園女子大学人間生活学部紀要, 7, 1-11.
- 長田瑞恵・関口はつ江・野口隆子（2010）「現在における幼児の育ちの傾向（7）－発達評価における発達パターンの縦断的傾向－」 十文字学園女子大学人間生活学部紀要, 8, 1-15.
- 関口はつ江（2003）「幼稚園における保育方法と保育者による発達評価の関連に関する予備的研究」 十文字学園女子大学人間生活学部紀要, 1, 27-40.
- 関口はつ江・長田瑞恵・野口隆子（2005）「幼稚園における保育方法と保育者による発達評価の関連（1）」 十文字学園女子大学人間生活学部紀要, 3, 1-13.
- 仙田満（2005）「子どもの居場所－その重要性と安全性（特集：子どもの生活環境）」 発達, 104（26）, 54-58.

## 資料：発達評価 項目一覧

領域	項目番号	質 問
知的	A1	かなで自分の姓名を書く
	A2	“右”と“左”の区別ができる、または、自分の左と右がわかる
	A3	“きのう”と“あした”の区別がわかる
	A4	“たて”と“よこ”の区別ができる
	A5	かなで書かれた自分の姓名を読む
	A6	両方の指が何本あるか、見ないで正しく言う
	A7	両方の指の数を正しく数える
	A8	黄色や緑など主な色の名前と実際の色がほぼ一致する
	A9	100円玉がわかる
	A10	自分の誕生日がわかる
	A11	四角形のお手本をまねてかく
	A12	人数を数えて物を配ることができる
	A13	サイコロの出た目の数がわかる
	A14	カレンダーで何日というとその数字を指す
	A15	絵本やお話のあらすじを人に話す
	A16	今日は、何曜日か分かる
	A17	粘土で“～らしく”動物、乗り物、野菜など、かたちのあるものを作ろうとする
	A18	頭、胴体、四肢のそろった人物画を描く
	A19	時計がわかる(12時、3時など)
	A20	相手の(友達)の言葉を理解しながら会話が成立する
	A21	クラス全員への先生の話を自分のこととして受け止め、理解する
	A22	動植物など自分の関心のあるものを本(図鑑)などでみる
	A23	自然現象(例えば雨が降るわけなど)の理由を尋ねたりする
	A24	ひらがなを読む
	A25	ひらがなを書く
運動的	B1	しきいの上(あるいは平均台)をまっすぐに両脚をかわりばんに踏み出して歩く
	B2	片足とび(ケンケン)をする、20センチぐらい
	B3	片足立ちをする
	B4	ブランコをこいでいる
	B5	でんぐり返しをする
	B6	スキップをする
	B7	相手が投げたボールを両手で受け止める
	B8	バットや棒でボールを打つ
	B9	ボールをつづけて10回くらいつく
	B10	ひとりなわとびをする(数回つづける)
	B11	子ども同士でリレーをして遊ぶ
	B12	鉄棒で前まわりをする
	B13	うんていでぶら下がって渡る
	B14	箸で食べる
	B15	はさみを使って簡単な形(紙)を切る
	B16	服の前のボタンをひとりでかける
	B17	ひもをかた結びに結ぶ(たて結びでもよい)
	B18	片目だけつむる
	B19	200mぐらい続けて走る
	B20	60cmの高さからとび下りる

領域	項目番号	質 問
情緒的	C1	友達の喜ぶことを自分から喜んでする
	C2	話を聞きながら想像して楽しむ
	C3	自分でよくしたいのに、できないとくやしがる
	C4	積み木を積んで、もう少しでできあがるところでくずれるとくやしがる
	C5	かなしい話を聞いて、かなしがる
	C6	遠足をたのしみに準備していて、中止になるとかなしがる
	C7	友達みんなのなかからはずれると、かなしがる
	C8	草や木をだいじにする
	C9	動物をかわいがる
	C10	小さい子をかわいがる
	C11	絵本や登場人物の、そのときどきの気持ちが言える
	C12	きれいなものを見て“きれい”という
	C13	風の音、雨の音などを感じ、言葉で表現をする
	C14	飼育していた小動物が死ぬとかわいそうがる
	C15	困っている子どもにやさしくする
	C16	自分から気がついて全体の役にたつ
	C17	友達の病気やけががよくなると喜ぶ
	C18	相手の気持ちを理解しようと、聞いたり考えたりする
	C19	必要なときは保育者の助けを（援助）を求める
	C20	自分の要求が通らなくても自分なりに気持ちをおさめる
	C21	自分の目標までやりとげようと、がんばる
	C22	ころんですりむいた膝（または手など）が痛くても泣かなくなる
	C23	おとな（先生や親）が喜ぶことをしようとする
	C24	相手や周りの人の気持ちを考えて自分の行動を変える
	C25	自分の大切なものが損なわれると悲しがる
社会的	D1	友達と遊んでいるとき、ほかの子の承諾や同意をもとめる
	D2	助けが必要などとき、ほかの子に助けを求める
	D3	ほかの子どもを援助したり、守ったりする
	D4	ほかの子どもたちに玩具をもってくる
	D5	ほかの子どもにめいわくをかけたなら、おわびを言う。
	D6	競争心がある（他の子どもとの間で）
	D7	数人がいっしょになって、子どもの発案した遊びをいっしょにする
	D8	自分のしたことを保育者に話して聞かせる
	D9	自分のしたことに責任を負う（自分のあやまちを謝るなど）
	D10	まかされたことを責任をもってする
	D11	保護者がいてもいなくても、きまったことはちゃんとする
	D12	“わたし”とか“ぼく”とかいう言葉で自分を呼ぶ
	D13	自分より小さい子ができるまで待つてあげる
	D14	友達が何かしているとき、じゃまをしない
	D15	お店屋さんごっこで、おつりのやりとりをする
	D16	信号を見て、正しく渡る
	D17	じゃんけんで勝ち負けがわかる
	D18	共同の物を順番に使うことができる
	D19	けんかなどのとき、自分の考えを相手にはっきりいう
	D20	友達同士のトラブルの間に入って收拾しようとする
	D21	保育者が掃除など子どもの生活のための仕事をしているのを見て、手伝おうとする
	D22	いやなときは相手にはっきり「いや」という
	D23	悪いことや困ることをしている子に「いけない」と止める
	D24	クラスみんなで何かするときなど、みんなに合わせて行動する（遅れないなど）
	D25	助けられたり、して貰ったとき「ありがとう」と感謝する

領域	項目 番号	質 問
生活習慣	E1	ソックス(短い靴下)をひとりではく
	E2	ひとりで鼻をかむ、または、自分で気がついて鼻をかむ
	E3	大便をひとりでする(全く手がかからない)
	E4	うがいをする
	E5	ひとりで歯ブラシを動かして歯をみがく
	E6	嫌いなものでも、がんばって食べようとする
	E7	汗をかいたら自分で着替える
	E8	水をこぼしたり、こぼれていたら、自分からぞうきんでふく
	E9	自分から、遊んだあとの自分の遊具をかたずける
	E10	自分から、遊んだあとの皆の遊具をかたずける
	E11	手ぬぐいやぞうきんをしぼる
	E12	自分から“いただきます”や“ごちそうさま”をいう
	E13	いわれなくても食事の前に手を洗う
	E14	脱いだものを一応たたんで(きちんとでなくてもよい)決まった場所に置く
	E15	食事の片づけを自分でする
	E16	所持品の始末をきちんとする
	E17	挨拶(おはよう、さようならなど)を自分からする
遊び	F1	自分から遊びを見つけて遊び込む
	F2	遊びのなかで、新しいことを考えだしたり、新しいやりかたを工夫したりする
	F3	周囲の物を積極的に遊びに活用する
	F4	身辺のものや出来事に関心を持って、遊びを取り入れたり、発展させる
	F5	いっしょに遊ぼうと積極的に仲間に誘う
	F6	遊びに欲しいものがあるとき、順番に待ったり貸してといて、何とかして達成しようとする
	F7	遊びがうまくいかないとき、自分達で協力して解決しようとする
	F8	遊びに集中し、周りが騒いでも妨げられない
	F9	積み木やブロックで、遊びの場所をつくる
	F10	ごっこ遊びのとき、そのものになりきって遊ぶ
	F11	友達とおもしろいアイデアを出しあって遊ぶ
	F12	積極的に泥遊びや砂遊びを楽しむ(どちらか片方でよい)
	F13	遊びの中で新しい役割を考え出したり、自由に役割を交換したりして遊ぶ
	F14	友達の遊びに進んで加わったり、友達の提案に乗って協調して遊ぶ
	F15	同じ遊びを数日間継続して発展させながら遊ぶ
	F16	遊びのルール(陣地ではつかまらないなど)を理解して遊ぶ